

|         |   |
|---------|---|
| 氏 名     | 仲井 達哉                                     |
| 授与した学位  | 博 士                                       |
| 専攻分野の名称 | 保健福祉学                                     |
| 学位授与番号  | 博甲第115号                                   |
| 学位授与の日付 | 平成29年9月22日                                |
| 学位論文の題目 | パーキンソン病患者の主介護者を対象とした介護負担感に関する研究           |
| 学位審査委員会 | 主査 竹本与志人 副査 中村光 副査 中村孝文<br>副査 川上貴代 副査 實金栄 |

## 学位論文内容の要旨

本論文は、パーキンソン病（以下、PD）患者の主介護者を対象に介護負担感に関する研究を行ったものである。PD は多彩な臨床症状を呈し、その症状や疾患がもたらす患者の心理や生活上の苦悩が報告されるとともに、療養支援を担う家族、とりわけ主介護者への過剰な負担が指摘されている。しかし、本邦においては主介護者の介護実態に焦点を当てた実証研究は皆無であり、患者の ADL 障害の程度が介護負担感と関連していることを報告するにとどまっている。臨床実践においては、主介護者を取り巻く心理社会的要因が介護負担感へ関与している可能性は高く、支援介入の起点となる要因の探索が求められる。近年の在宅療養の推進政策は難病医療においても重視され、PD 患者の療養環境整備は喫緊の課題といえる。その点からも、療養環境の主要な位置にある主介護者の安定的維持は重要であり、また支援介入策が望まれている。

第1章では、Systematic Literature Review を行い、418 編の諸外国の先行研究のうち、予め設定した4つの組み入れ基準を満たす11編の論文を精査した。その結果、介護負担感の関連要因は患者属性、疾患・症状要因、介護者要因、社会環境要因の4つに分類できた。医学的要因については一定の知見を得ることができたが、社会・環境要因については知見の蓄積が不十分であった。とりわけサポート体制などの介護者の環境要因については研究の展開が望まれることを提示した。

第2章では、主介護者の介護負担感の関連要因について、心理社会的視点から探索的に検証した。本研究ではより精緻な結果に向け、先行研究に比して分析レベルを高次に設定することを意図し、介護負担感を従属変数、患者の病状や介護環境などを独立変数としたMIMIC（多重指標多重原因）モデルを構築し、構造方程式モデリング（以下、SEM）を用いて検証した。その結果、介護者の性別、副介護者、服薬管理、経済的困窮、患者の年齢、ヤール重症度、ADL、家庭医の8要因が介護負担感と有意に関連していた。そのうち副介護者、服薬管理、経済的困窮、家庭医の4要因が心理社会的要因であったことが確認できた。支援介入の可能性を探るという研究の視点に立ち、主介護者を取り巻

く介護環境への着目、とりわけ主介護者の周囲に位置する人的資源に焦点を当てると、副介護者などの“家族”、および“医師”の存在が今後の研究展開の起点に成り得ると考えた。以上の成果より、今後の研究課題として、家族および医師の各々が有する機能に着目した検証へと研究を展開していくことの可能性を提示した。

第3章では、第2章で導き出した研究の視点のうち、主介護者を取り巻く人的資源としての家族機能に着目し、介護負担感との関係について検証することを目的とした。検証にあたっては、家族機能が主介護者の介護負担感を規定するという因果関係モデルを構築し、SEMを用いて実証した。その結果、「家族の凝集性」が介護負担感の下位概念である「社会的活動の制限の認知」および「否定的感情の認知」の2因子に対し有意な関連を認めたが、「家族の適応力」は、「否定的感情の認知」にのみ有意な関連を認めた。

「家族の凝集性」が2因子双方に有意に関連していたことは、主介護者による家族成員のつながりに対する認知を注視し、それを評価することの有用性を示唆できたといえる。また、家族構成や家族成員同士の二者関係、副介護者の有無などにとどまらず、全体性としての家族機能に着目する必要性が確認されたと解釈できる。それゆえに主介護者の家族機能に対する認知が不良であった場合には、その介護負担感の軽減や心理的支援を目指した代替介入策の検討が求められるという知見を提示できたといえる。

第4章では、第2章および第3章の結果を受け、主介護者を取り巻く人的資源としての「患者の主治医」に着目し、家族機能の高低を考慮した上で、パス解析による多母集団同時分析を用い、介護負担感と主治医による情緒的サポートとの関係を検討した。その結果、家族機能の不良群においてのみ、介護負担感の2因子双方に対し、主治医による情緒的サポートが有意な負の関連を認め、主治医による情緒的サポートが介護負担感の軽減に寄与する可能性を明らかにした。主介護者の身近な私的サポート層の機能やサポートの享受環境を適切に評価することを前提に、そのサポートが十分でない場合に、階層的補完モデルの視点をもって、主治医による情緒的サポートが奏功することは、主介護者の支援策を講じる上で、新たな知見を提示できたといえる。

第5章では、以上の結果を踏まえて本論文の結論を述べた。主介護者の支援策提示に向けては、その人的環境に着目し、私的資源である家族、また公的資源である主治医の機能を評価するとともに、主介護者の人的資源の階層性を適切に捉える必要性を明らかにした。また、家族機能を補完する医師の関与については、教育・研修システムの充実に向けた展開、両者の関係性を肯定的に媒介できる調整者の存在が支援の方向性として提示できたといえる。

## 主業績

| No.1 |   |
|------|---|
| 論文題目 | パーキンソン病患者の主介護者を対象とした介護負担感と患者の主治医による情緒的サポートとの関係　－主介護者が認知する家族機能に着目した多母集団同時分析－ |
| 著者名  | 仲井達哉、杉山 京、倉本亜優未、竹本与志人   |
| 発表誌名 | 社会医学研究 Volume.34, No.1, pp.41-53. (2017)                                    |

## 副業績

| No.1 |   |
|------|---|
| 論文題目 | パーキンソン病患者の主介護者における介護負担感の間連要因の検討         |
| 著者名  | 仲井達哉、杉山 京、澤田陽一、桐野匡史、柏原健一、竹本与志人          |
| 発表誌名 | メンタルヘルスの社会学 Volume.20, pp.45-55. (2014) |

## 関連業績

| No.1 |   |
|------|---|
| 論文題目 | パーキンソン病患者の家族介護者における介護負担感に関する要因の文献的検討        |
| 著者名  | 仲井達哉  |
| 発表誌名 | 日本在宅ケア学会誌 Volume.17, No.1, pp.33-40. (2013) |
| No.2 |   |
| 論文題目 | パーキンソン病患者の主介護者における介護負担感と家族機能に対する認知的評価との関連   |
| 著者名  | 仲井達哉、杉山 京、澤田陽一、桐野匡史、柏原健一、竹本与志人              |
| 発表誌名 | 厚生の指標 Volume.61, No.7, pp.19-28. (2014)     |

## 論文審査結果の要旨

本論文は、パーキンソン病（以下、PD）患者の主介護者を対象に、介護負担感の軽減に資する介入策を見据え、主介護者のインフォーマル・フォーマルな人的資源の活用可能性の視点から「家族集団」と「患者の主治医」に着目し、それらとの関係性を明らかにしたものであり、得られた成果は次のとおりである。

第1章では、国内外の先行研究の Systematic Literature Review を行い、その結果をふまえ、第2章では主介護者の介護負担感に関係する要因を探索するため多重指標多重原因モデルを構築し、構造方程式モデリング（SEM）を用いて検証している。分析の結果、副介護者等の「家族」および「医師」の存在が今後の研究展開の起点に成り得ると判断し、第3章ならびに第4章ではこれらとの関係性を検証している。第3章では「家族機能」に着目し、SEMを用いて介護負担感との関係について検証した結果、有意な関連が確認され、家族機能に着目する必要性を明示している。また、第4章では「患者の主治医」に着目し、家族機能の良否を考慮した上で主介護者の介護負担感と主治医による情緒的サポートとの関係を多母集団同時分析により検証している。結果、家族機能の不良群のみ介護負担感に対して主治医による情緒的サポートが有意な関連を示し、主治医による情緒的サポートが介護負担感の軽減に寄与する可能性を明らかにしている。

第5章では、以上の成果をふまえ、主介護者の支援においては、家族と主治医の機能評価のみならず主介護者の人的資源の階層性を適切に捉える必要があること、医師の関与については教育・研修システムの充実に向けた展開が求められること、両者の関係性を肯定的に媒介できる調整者の存在が重要である等、臨床評価と介入の可能性について提起している。

以上のことから、本研究成果はPD患者の主介護者の介護負担感軽減に関する新しい知見を提供するものであり、保健福祉学領域の研究と臨床実践に有意義なものであると判断された。また、公聴会において適切なプレゼンテーションと質疑応答が行われていた。

以上の結果より、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（保健福祉学）の学位論文として価値あるものと認める。